

日本で最初の公許女性医師 「荻野吟子」の生涯



人その友の為に己の命をすつる

之より大いなる愛はなし

(ヨハネ伝第一五章十三節)

①吟子の出生と荻野家「ながやんち」

荻野吟子は、嘉永4年（1851）3月3日、幡羅郡俵瀬村（現在の熊谷市俵瀬）に名主である父・荻野綾三郎と母・かよの五女、「ぎん」として生まれました。

吟子が生まれた荻野家は、「ながやんち」と呼ばれる長屋門を構える大きな家でした。この長屋門は、現在、群馬県千代田町の光恩寺に移築されています。



旧荻野家長屋門
（群馬県千代田町 光恩寺）

父・綾三郎は、藍葉の取引などで大規模な商売を展開していました。また、俵瀬村の名主役だけでなく、周辺の村々を束ねる取りまとめ役も務めた、この地域を代表する人物でした。

吟子の故郷は、埼玉県内の利根川沿いの地域です。深谷の渋沢栄一や羽生の清水卯三郎など、近代日本の成長に貢献した人物を数多く輩出しており、文化的なレベルが高い土地柄でした。

②最初の結婚と医師への決意

吟子は15歳の頃、上川上村（現在の熊谷市上川上）の名家・稲村家の長男・貫一郎と結婚しました。

貫一郎は、10代で村の名主役を務めるなど、若くから頭角を現した人物です。明治8年

（1875）には埼玉県下初の自由民権運動結社「七名社」の創立メンバーとなり、その後は県会副議長を務めたほか、銀行経営や耕地整理事業など地元の発展に大きく貢献しました。



稲村 貫一郎
（埼玉県立文書館寄託中村(宏)家
文書No.254）

しかし、21歳の頃、吟子は婦人病に罹患します。大学東校（現在の東京大学医学部）に2年間近く入院し、一時は命も危ない状態でした。

この入院生活の中で、吟子は男性医師に診察される辛さや、同じ病で苦しむ女性たちの悲痛な声を目の当たりにします。

「自らが医者になり、多くの女性を救いたい」この経験が、医師を志す強い決意となりました。退院後、吟子は夫・稲村貫一郎と協議離婚し、新たな道へと歩み始めます。

③文化人・教育者に成長

離婚後、吟子は医師を目指して長い学びの道に入ります。まず、俵瀬村に近い妻沼村の「両宜塾（りょうぎじゅく）」で漢学者・松本万年に師事します。この塾は地域リーダーを多く輩出しました。のちに女医第2号となる生沢クノ（深谷市生まれ）も松本門下です。



妻沼 両宜塾(現存せず)



井上 頼圀(『続己亥叢説』)

23 歳頃には上京し、神道中心の国民教化政策を進める井上頼圀（いのうえよりくに）のもとで国学を学びます。女性指導者を養成する「女教院（じょきょういん）」の教師としても活動しました。

翌年には、甲府の女性国学者・内藤ます子の熱心な誘いを受け、「甲府女学家塾」で教員として働きます。

ます子の病気を機に甲府を離れると、開校したばかりの日本初の女子教員養成機関、東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に入学します。ここで約4年間学び、優秀な成績で卒業しました。

吟子は、この頃には、文化人、そして教育者として、立派な成長を遂げていました。